

山賊の墓

木崎とこと子

講談社

山賊の墓

崎とつ子

さんぞく はか
山賊の墓

一九八九年五月三〇日 第一刷発行

著者——木崎さと子

© Satoko Kizaki 1989, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽三―三―三 郵便番号二三 電話東京三―九壺―二三(大代表)

印刷所——株式会社精興社 製本所——株式会社大進堂

定価——一三〇〇円(本体一二六二円)

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

山賊の墓

裝幀
菊地信義

夜半に窓が鳴って眼を覚ました。風にざわめく樹々の音に混じって遠くから、竹の鳴る音が聞こえてきた。

五、六年前、初めてこの土地を訪れた日も風がつよかった。高い竹が、その高さに耐え兼ねるように、風にしなっては揺れ、互いの幹を打ち合う。堅い音の響きは、虚空にたかく鳴って、天鼓という言葉をもその意味も知らぬまま、文代は思い出した。

「この音が気になるかしら」と文代が言った時、良治は「だいじょうぶだろ。自然の音だから」と応えて、事実この家を建てて引越して来てから、良治の生きていた間はかなりの風の

日でも、そのために眠れないことはなかった。

深夜、誰も視ていない闇のなかで、竹と竹とが打ち合って、自らの内なる空洞を鳴り響かせている。

誰も視ていない、というなら、昼間だっておなじことなのだが、しかし日光があれば、高く空にのぼっていく空洞の音は眼に映るようでもあろう。

独り寝に馴れはしたが、竹の鳴る夜ばかりは、早く朝がくればいい、と願った。

人里離れて自然のなかで暮らしたい、という願いは夫婦で一致して、房総の山中に土地を求めた。山と呼ぶのもおかしい、せいぜいが五十メートル足らずの低い丘陵である。バスか車に三十分も乗れば漁港のある町に出られるし、東京までも二時間半ほどである。

土地の不動産屋が「別荘地」という名目で「分譲」するという、どこから聞いたのか良治が行ってみよう、と言ったのが、ひとつの宿命のようなものであった。谷というほどでもない窪地を小魚の泳ぐせせらぎが流れ、そのせせらぎがそぐ、これは谷川の名にふさわしい清流も近くにあった。釣りもできる、と良治は一遍に乗り気になった。せせらぎまで至る斜面は大木で埋まり、老人の脚にもこたえない緩い坂道を上りきったところには、ちょっとした家は建つほどの平地がある。

息子の修治一家との同居に疲れ始めていた文代にも、魅力は充分だった。今までの住まいに

も老夫婦の部屋は残しておく。そういう条件でここを買うことに同意した。

分譲地と呼べるような造成がしてあるわけではない。山林を買い取って、砂利敷きの私道をつけただけのことである。

周囲の土地もそれぞれに東京近辺に住む人に売れているそうだが、今までのところ家はいっ
こうに建たない。

電気電話は引き込めるが、ガスはプロパン、水は井戸である。もっともプロパンにしろ井戸にしろ昔のそれとはまるで違う進歩で、実際に使ってみれば、都市ガスや水道とほとんど変わりはない。

小さな家ながら、念をいれて設計し、いよいよ年をとって動けなくなるまでのしばらくを楽しむと計画したのに、良治は心不全であっけなく逝ってしまった。まだ七十にも手の届かぬ若さで、最後の勤めを退いて間もなかった。

五分も歩けば農家はあるものの、六十過ぎての女の独り暮らしにはあまりにも淋しいところである。早く帰ってこい、と修治一家からも娘の友美の家からもまんざら口先だけでもなさそうな誘いは受けているが、その内に、と応え応えして、二年が過ぎてしまった。

最初の半年ほど、東京に戻って修治や友美の家を行ったり来たりしていたところ、か弱い鬱状態に陥って、不眠の夜が続いた。夫を失った衝撃のせいもあるうが、むしろ身に合っていた房総の暮らしを離れたため、と自ら判断して、思いきって戻って見たら、やはりよかった。樹々

に囲まれた独り暮らしは、おのずと氣も緊る。顔色もよくなり、眠りも深くなった。こうして風の音に目覚まされる夜も、うつらうつらと再び寝入った。

いくらか寝不足の頭も、冷たい水で洗面して、窓を開け放ち、朝の空氣を部屋一杯に入れると、すっきりとなった。

仏壇の前に立って、ちょっと良治の写真を眺める。数年前の写真だが、頭が禿げて充分老人らしく見える。自分もやがてこの年齢に迫いつくのだ、と改めて掌を合わせるでもなく、何とない思いを二言、三言、胸の内つぶやく。

何十年と共に暮らして何もかも通じていたようにいて、まだ語り合うことはたくさん残っていた。むしろこれからが互いの心底をあらいだらい話し合える時期であつたはず、と残念なのはむろんだが、しかし良治が元氣でいれば、毎日の食事の用意をはじめ、身の回りのことに氣をとられ、そう改まって話し合うようなことが現実にとれほどあり得たかは分からない。それに何より、思いのすべてを言葉にするなど出来っこないのだ。戦中戦後の食糧難の話などは、折りにふれては繰り返したであらうが。

文代は写真にむかって、（山賊さんにお詣りしましょうね）と頷きかけて、庭に降り立った。庭といっても、それらしくかたちをつけているのは家のほんの周囲だけで、あとは買った時のままの山林である。低い丘陵だが、この家の敷地のなかを尾根道が通っている。ふだん通う

人もないが、下のバス通り沿いにある二、三の農家がむこうの台地に畑をもっていて、農具を持って近道をとる姿にたまには行き合う。

「山賊の墓」のことを文代に教えたのも、老いた農婦であつた。

敷地の一隅に小高くなつた部分があり、そこに際立つて古い樺の大木があるのは、むろん買う時から氣がついていた。契約をすべて済ませて、まだすぐ家を建てるわけではないが、と楽しみがてら散策にきた時に、文代はふとそこに上つてみる氣を起こした。登るといふほどの高さがあるわけではないが、丈の高い草が生い繁り、蔦や葛の蔓がからんでるので、なんとなく近寄らずにいたのである。

良治は良治で新たに自らのものとなつた土地を見回りたくなつたのだろう、小枝を杖代わりに振り回しながら、バス通りとは反対側の谷の方に降りて行つた。

木の枝や蔓につかまって足場を探りつつ、大樺の下に立つた文代は、思わず声をあげた。

大木の根方に小さな石の舟形地蔵が倒れかかつていた。

文代は膝が汚れるのもかまわずに、ひざまずくと、両手に力をこめて、石地蔵を起こした。苔が生えてはつきりはしないが、かわいらしい顔立ちのようだ。

良治が戻ってくる音がした時、文代はかるく興奮した声で呼びかけた。

「ねえ、ここになにがあると思う？ あててみて」

少女のようにたかく叫んだとたん、既視に似た思ひに襲われた。こういうことが、はるか昔

にあった……いつ、どこで、と問う間もなく、良治が蔓を搔き分けて上ってきた。

ほう、と良治も意外そうな声をあげたが、すぐに「どいてごらん」と文代を押し退けるようにして、石地蔵をしっかりと立て直した。

「なにか書いてある」

苔を払って透かすようにすると、安永三年午十二月五日と読めた。

安永など江戸時代のこと、文代達に関係のあるはずがない。

「よかった」

文代はつぶやき、良治は、なにが、とも聞かなかった。

湿っぽい腐葉土のにおいに包まれて、しばらく夫婦は黙っていた。

何のためのお地蔵さんと考えたわけではないが、いよいよ家を建てることになって再び訪れて、これが山賊の墓だ、と老農婦に聞かされた時には、文代はちょっと絶句した。この上の方に山賊が棲んでいた、と老婆はまるで自分の眼で見たように言う上に、老婆自身が山賊の娘ではないか、と疑いたくなるほど、時代離れた野性の気配を漂わせているので、文代はそれがつい最近のことのように一瞬錯覚してしまったほどであった。「この上になにか、あるでしょうよ、今でも」

老婆は独特の訛りで言う、と、旦那と二人で住むならいい、と言い捨てて、鎌を振りながら林のなかに去って行った。

山賊ですって。

その時も傍にいなかった良治が戻ってくると、文代は早速に告げた。

山賊のお墓ですって。

ほう、と良治は格別の表情は見せなかったが、家が出来上がって引越してくると、大樺の下草を払い、そこに至る道も細いながらに整えて、「墓前」はちょっとした木蔭の聖地のようになった。

互いに特に話し合ったわけではないが、「山賊」を弔ってやろう、という気持が共通していた。山賊であれば名前があったにしても、墓に刻んでないのは当然である。

もっとも一番近い隣家である農家の主婦などは、この山の上に山賊がいたなぞ、そんな言い伝えを聞いたこともない、と断言して、文代をがっかりさせた。あの肥ったばあさまでしょうが、と苦笑して、あの人はすこし頭がおかしいから、なんでも言いますよ。なんでそんなことを本気にするか、という表情になった。

だって、それじゃ、あのお地藏さんは何のためなのかしら？ と訊こうとして、文代は口をつぐんだ。もしや、この主婦は土地の人であっても、あんなところまでは探索せず、お地藏さんがあることを知らないのかも知れない。それなら黙っていよう、こんな過疎地でも最近では郷土史研究などが盛んだから、教育委員会あたりに報告されたら、せっかくの夫婦の空想の種が壊されてしまい兼ねない。頭のおかしい老婆の話でも信じている方がいい……。

本当に山賊がいたのかしら、と時々文代は良治に訊いた。良治が知っているはずもなし、何度も話題に上げたことなのだが、独り言のようなものである。

いたんだろ、と良治はあっさりと言定する。

「下のバス通りは昔の街道だから、この山の上にひそんでいて、旅人が通りかかると、襲って食べ物を奪うんだ」

老婆に負けない、見てきたような口調である。いや、もしかしたら経験があるのかしら、と文代はちらと考えた。良治は兵隊に行つて、南方で敗戦を迎えている。

「あるいは」

文代がそんな空想を嫌がる女ではないからか、良治は続ける。

「なにかで追い詰められた男がここで殺された、ということも考えられる」

「なんで、特にここなのよ」

「あっちの畑のある台地の方から尾根伝いに追つ手を逃れてきたら、ここがもうどんづまりで逃げようがない。ここで殺されて、土地の人が哀れんで、お地藏さんをつくつた」

莫迦々々しい、とは言いきれない。この間の戦争まで、そんなことはいくらもあったのだ。

特高に追われた思想犯……、良治にその経験はないだろうが。文代の友達でも「主義者」と恋をして、自殺にまで追い込まれた人もある。あの時代には何事でも起き得たのだ、と江戸時代のお地藏さんだということを忘れて、文代は、ここで死んだ「その男」を弔う気になる。

良治の墓は新しくできた公園墓地にあり、明るく開けた芝生の上では、若い家族がピクニックをしている。文代も命日に近い日曜日を選んで、修治や友美とそちらに詣でるが、気持の上ではむしろ「山賊の墓」の傍らに佇む時の方が、良治を身近かに感じる。いつか語り合いたいことが、お互いにあった、それは確かである。しかし生きていれば話にくいこともある、今こうして樹下の「聖地」で風に吹かれながら語ることなら、良治はすべて了解するだろう。

死者と語る、という気分は良治にもあったのだらう、「山賊とたまには喋ってやろう」などと言って、庭仕事の合間の一服をここで過ごすために、ベンチまでしつらえたのだから。まさか自分がこんなに早く逝ってしまい、残された文代がここでゆっくり思いにふけることになるとは、考えなかったらうが。

石地蔵の周りの草を抜きながら、良治と話すつもりが、いつのまにか別の男のことを考えていた。ここで死んだ「その男」と違って石堂巖はまだ生きている。

良治がいた頃は日々のことに気をとられて、巖のことなど、そうは思い出さなかったのに、今は暇になったせいも、よく考えこんでしまう。死ぬまでに、一度はあの男に謝りたいものだ、と考え出すと、きりが無い。文代に対して直接に悪事を働いたわけではなく、従って文代に謝る理由はない。そう分かっているだけ、腹立たしい。

しかし考えても何にもならない。どうせ世に栄えるのは悪人ばかりだ、と「山賊」を哀れんで弔う気持とは裏腹な気分で、文代は家のなかに戻った。

独りの朝食は紅茶にトーストに果物程度の簡単なものが、外の空気を吸った後だから、それなりに食欲はあった。テレビをつけて見ながら食べる習慣はない。だいたい文代はあまりテレビも見ず、新聞も読まない。何をしているのか、と問われれば、ぼんやりしています、とでも応えるほかない日常である。強いて言えば、思い出している。生まれて以来、自分の身に起きたことを考えている。考えてもどうにもならないことを、考えている。考える種になるような思い出はいくらもあった。

幼い頃の記憶をたどってゆくと、さかのぼるにつれてだんだんあたりが薄暗くなり、やがて闇になって何も視えなくなってしまう。

その真っ暗な闇のなかから、ぼんやりとにじみ出るように《自分》の記憶がはじまって、とぎれとぎれながら、一場面ずつの光景がたしかに現在の自分につながっている、と確信できるとは、本当にふしぎなことだ。

誰もが一人ひとり、そんな闇を自分の初めにかかえている。人の数だけ闇があって、そこではみんな記憶を失って溶けてしまうのに、ほかの人から見ていると、分からないことなんか何もない赤ん坊や幼児の生活なのだ。

たとえば修治や友美だって、母親の眼から見れば生まれてきた前後のことに分からないことは何もない。受精した瞬間こそ特定できないにしても、お腹のなかでだんだん大きくなり、やがて生まれ出た時のことから、彼らの記憶にないことを、ほぼすべて眺めてきた。

闇なんて何処にもないのに、やはり一人ずつの子供のなかでは、その辺はぜんぶ闇なのだ。中年になり自分自身に子供がいる現在でも、文代が「あなたが小さい時には……」といった話をしてやると、へえ、とくすぐったいような、何かを納得したような顔になる。が、だからといって、彼らのなかの闇が消える訳ではないのだ。

文代自身の薄闇のなかで、ぶつぶつと言葉にならない言葉をつぶやきながら、紅茶を吸っている、電話が鳴った。

こんな早い時間にかけてくるのは、友美に決まっている。

「はい、もしもし」

……もしもし、と応える控え目な声は、友美ではなかった。

「ああ、有子さん」

文代は思わずたかい声をあげた。今の今、有子のことを考えていたのだ、と言いつうになつた。

有子は、文代の乳姉妹であった大塚優子の遺した娘である。昭和の初め、母は嬰兒だった文代を連れて、乳母として大塚家に奉公していた。母は文代を懐妊中に夫に先立たれ、田舎に帰るつもりでいたところが、同郷の人の世話で、東京の資産家である大塚義典の屋敷に住み込むことになったのである。

そんな事情は文代も小さい時から聞かされて知っていたし、別段訝しいこともない。当時周

囲にいた人達にすれば明々白々のことである。それなのにやはり文代にとっては、最初の闇のなかから浮かび上がる光景が、母の乳房を優子に奪われる場面であることは、なんとなく納得がいかない。

理屈としてはむろん分かることで、文代の母にしてみれば、わが子より奉公先の子供を優先せざるを得ないに決まっている。臍ろであるにしても記憶に残っているということは、二、三歳にはなっていたはずで、そんなに大きくなっていて乳を吸うというのもへんだが、戦前の日本では離乳を急ぐなどという考えも一般にはなく、歩くようになった子でも泣けば宥めるために乳を含ませる母親はいくらかあった。もっともそんな時期まで文代の母の乳が出たはずもなく、甘ったれる子を膝にのせただけのことであれば、母も迷わず文代を降ろして、優子を抱き上げたのだろう。ただ、記憶の周囲が闇であるために、怒って泣き喚いたそこだけが、つよい印象を残して六十年も経った今でも、割り切れない感じがわだかまっている。その闇のなかから、いきなり有子が立ち顯れたようだった。

「ごぶさた致してますけど、お元気？」

耳に残る優子の声よりはずっと低く、調子も控え目である。もっとも四十年あまりも前に二十にもならず死んだ優子の二倍以上の年齢に有子もなっているのだから、落ち着いた話し方をするのも当然だった。

「まあまあ、何とかやっております。有子さんは？ お元気ですか」